# 多義語「さす」とその周辺

成　田　徹　男

## 0．はじめに

まだ、「ワープロ」「パソコン」の普及する前に出された『日本語研究』の創刊号において、「かかる・かける」という多義語の分析をこころみたことがある。そのころのことを思いおこしつつ、再び多義語についての考察をしてみたい。

とりあげるのは、動詞「さす」である。まず、多義語の意味の構造に関する仮説を検討し、それにもとづいて用法全体に共通する意味特徴を考え、次にその意味・用法の広がりを整理する。

## 1．多義語の意味

### 1－1．多義語を多義語たらしめる意味の共通性

ある広い用法をもつ語を、複数の同音異義語ではなく、多義語と認定する根拠は、その用法全般にある意味の共通性があることである。

ところで、動詞のもつ意味的特徴のうち、たとえば（仮に名付けて）＜状態性＞＜意志性＞＜働きかけ＞というような文法論的意味特徴とでもいうべきものは、動詞の文法的特徴とのかかわりがあり、またそれを意識した名称がつけられることが多い。文法的特徴とは、たとえば、命令形をもつか、命令形があるならそれが命令の意味かそれとも願望であるか、あるいは、テイル形になるか、なるなら進行の意味か結果の残存の意味か、あるいは、受動文になるか、直接受動文が可能か、などのようなことである。形態や、ムード、アスペクトなどの文法的カテゴリーに深く関係している。動詞を大きく分類しようとするときには、このような特徴によって区分するのが便利である。

しかし、多義語の、意味の共通性というものは、このような側面からとらえることはむずかしい。なぜなら、多くの語ではその用法の大部分がこれらの特徴を共通してもつことが多いのにくらべて、多義語は、そのひとつの多義語の用法の中に、これらの特徴の異なるものが混在していることが多いからである。「かける」を例にとれば、「めがねをかける」「椅子に腰をかける」という用法は、対応する自動詞「かかる」の表現がなく、直接受動文をつくらず、～テイルで結果残存（状態）の意味をもあらわすのに対して、「こんろにやかんをかける」「彼に声をかける」という用法は、対応する自動詞「かかる」の表現があり、直接受動文ができ、～テイルで進行の意味をあらわす。つまり、このような特徴は、むしろ多義語の意味区分をたてるのに非常に有効であると考えるべきであって、共通性をとらえるのにはあまり役にたたないのである。

とすると、多義語の意味の共通性は、意味論的意味特徴とでもいうべきものに求めざるをえない。ここでは、仮にこれを「中核的意味」とよんでおく。中核的意味というのは、命題（Proposition）とモダリティー（Modality）という二分法でいうなら、命題の、さらにボイス（Voice）などの文法的カテゴリーにかかわる部分を除いた、まさに語の意味の骨格の部分をさしている。

## １－２．中核的意味

意味論的意味特徴といっても、統辞構造と無関係なわけではない。特に、動詞については、その要求する名詞句が動詞の意味のありかたと深くかかわっている。その基本構造は、これまでの用語でいうなら深層格の枠組みに近い。ただし、格役割は、中核的意味のレベルでは固定されたものではなく、中核的意味から生じる派生的意味ないし用法区分のレベルで具体化していくと考えている。

動詞の中核的意味は、状態のありかた、状態の変化の方向性と、必要な要素およびその位置関係、そして働きかけの方向性などから成る。このうち、要素やその位置関係は、図像的なパターンとして図示できるようなものと考える。必要な要素が、その動詞の文型における名詞句に相当する。

中核的意味は、その性質上、抽象的にならざるをえない。しかし、あまりに抽象化してしまうと、多くの動詞について同じになってしまい、語毎の区別があいまいになる。ここでは、それぞれの多義語の中核的意味は、他の語の中核的意味と区別されるだけの特徴をもっていなければならないとしておく。もっとも、一方では中核的意味それぞれの共通性からさらに抽象的な意味構造を考えることは可能であって、それは、結局、現象についての人間の認知の型といってもよいものかもしれない。その型がいろいろに変化して、いくつかのパターンを産みだし、語の中核的意味というかたちで実現しているとしてもよい。

## １－３．派生的意味

さて、そのような中核的意味の一部が変化することによって、派生的意味が生じる。その変化とは、たとえば要素のどれかが「背景化」して名詞句として具現化しないとか、ある要素が別の要素との関係を変えるとかいったことである。この段階になって、必須の格（すなわち必要な名詞句）の数が具体化されてくる。

派生というのは、ここではあくまで共時的に考えている。その背景に通時的な派生関係があることはもちろんであるが、消えてしまったものは対象外とし、慣用句として化石のようにして残っているものは関係づけられる範囲で扱うにとどめる。派生的意味の区分の順序は、通時的な発生の順序ではなく、また現在よくみられる用法の順序でもなく、中核的意味からの変化の度合や変化の方向から決定されるべきであろう。以下の記述においてもその立場にたって分類をこころみたが、基準を明示するまでにはいたらなかった。

派生的意味は、さらにいくつかの用法区分として具現化する。この段階になって、文型、すなわち格助詞パターンがはっきりする。また、名詞句としてとりうる意味の範囲も限定されてくる。逆に、作業仮説としては、格助詞パターンや名詞の意味の限定をてがかりに、用法の区分をたてることになる。

このとき名詞の範囲の広狭があるが、それは、その区分が共時的にみて優勢であるかどうかによる。ひとつの名詞に固定されてしまえば、もうそれは慣用句に近いものである。

ところで、この区分において重要なのが、いわゆる自他の対応である。「対応する」とは、意味的特徴が共通し、統辞構造では自動詞の「Ｂガ～」という構造にその事柄をひきおこす動作主が加わって「ＡガＢヲ～」という構造になっている、ということである。したがって、自他対応する用法区分は、自動詞と他動詞をまとめてあつかえば、その関係がよく示される。動詞「さす」では、「ささる」との対応をみていくことになる。ただし、対応する用法のある自動詞と他動詞といえども、別語であって、中核的意味は別にとらえておく必要がある。自他のどちらかが自他対応する用法しかもたず、いわばどちらか一方がもう一方を含むような関係であれば、自他対応する用法の（用法の広いいわば含む側の動詞の）意味が、ほぼ、用法の狭い（いわば含まれる側の）動詞の中核的意味ないし派生的意味に相当することになる。また、自他のいずれもが、対応しない用法をもつこともある。その場合は、似てはいても、別々の中核的意味をもつ。

このことから「自他対応のある用法と、そうでない用法とは、別の用法区分とする。」という、用法の区分の作業仮説をたてておく。なお、当然ながら自動詞と他動詞とは、文法的な意味特徴においてはかなり異なるのがふつうである。

## ２．多義語の動詞「さす」の意味

以上のような仮説にもとづいて、以下に「さす」の意味について整理した結果を示す。

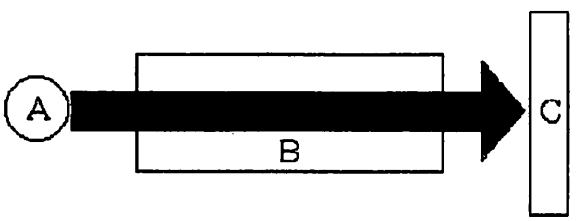
「さす」の中核的意味

《あるモノＡが、あるモノ／トコロＢをとおって、あるトコロＣにいたる。》

＜そのことにより、ＢまたはＣに変化が生じる。＞

＜実際の移動がなく、指向性をもつ。＞

＜あるヒトＤが、そのことをひきおこす。＞



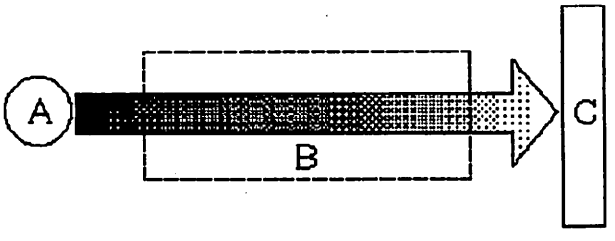
《　》で示したのが、基本となる意味であり、その要素の位置関係が図に示されている。また、＜　＞はそれに付け加わる意味である。図の黒矢印は「移動」の方向である。

基本的には帰着点に重点のある（つまり要素としてあらわれない起点はあまり問題にならない）「移動」であり、それによって何かに変化をもたらす、ということである。また、「移動」は希薄になって「指向性」となったり、図にはあらわれない動作主がつけくわわることもある、ということを示したのが＜　＞の部分である。

「さす」の派生的意味１

《あるモノＡが、（あるモノ／トコロＢをとおって）あるトコロＣにいたる。》

＜その状態になる。＞




派生的意味１では、Ｂが背景に後退していき（破線）、Ｃの状態変化が重要になる。矢印が右ほど薄くしてあるのは、移動が具体性を失いつつある状態のつもりである。

下位分類となる用法区分を以下に示していく。１行目に「派生的意味の番号－区分番号」「その区分の意味の辞書的説明」２行目に「自他の別」「表記」「（仮の）意味区分」３行目に「文型」４行目以下に用法の例をあげる。また、末尾に関係する複合語（スペースの都合上、後接するものに限定する）や慣用句を示す（注参照）。

１－１　光があるところにいたる、はいる、あたる

自動詞　　射す・差す　　動き・移動・変化

モノＡガ　（モノ／トコロＢカラ）　トコロＣニ

窓からまぶしい朝日が部屋の中にさす。午後になって日がさしてきた。

日差し

１－２　潮がみちてくる

自動詞　　差す　　変化

モノＡガ　トコロＣニ

小屋の近くまで水がさしてきた。

差し潮

１－３　顔色や表情に変化のきざしがあらわれる

自動詞　　差す　　変化

モノ（状態）Ａガ　トコロＣニ

顔に赤みがさす。血の気がさす。彼の表情に陰りがさす。心に、彼女のかげがさす。茜さす東の空。

面ざし

１－４　心に（望ましくない）変化があらわれる

自動詞　差す　変化

（コトＸニ）　ヒトＣガ　モノ（状態）Ａガ

彼は勉強に嫌気がさす。眠気がさす。魔がさした。気がさす。

きざし

１－５　ことがらに変化のきざしがあらわれる

自動詞　差す　変化

コトＣニ　モノ（状態）Ａガ

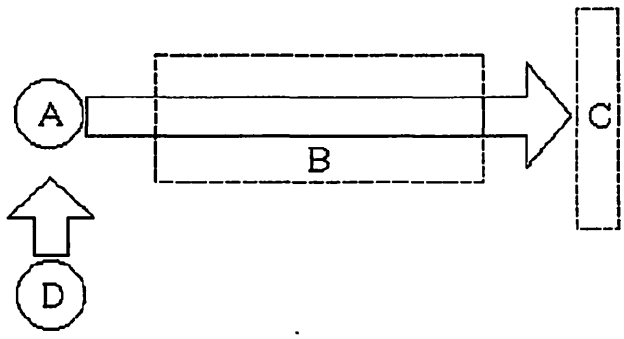
バラ色の計画に陰がさした。

区分の１－１は「移動」の要素を残しており、Ｂがあらわれることもあるが、１－２以下では希薄になる。１－３は、Ｃがヒトの一部である。１－４は、Ａの名詞と「さす」とのむすびつきが固定化して、Ｃがガ格となり、さらに別の名詞句Ｘをとることもある。また、１－４以下では、Ｃが「トコロ性」を失って、１－５は慣用句に近づいている。

「さす」の派生的意味２

《あるヒトＤが、あるモノＡを、前またはあるモノＣにむかって、だす。》

＜モノＣをはかる。＞




派生的意味２では、Ｂは消え去り、「移動」のベクトルは弱くなって（白ヌキ矢印で示した）、場合によってはＣも希薄になっていく。ここではＤが図に登場している。Ｄからの白ヌキ矢印は、「働きかけ」の方向を示す。用法区分は次のとおり。

２－１　手や手にもったものを前にさしだす

自動詞　差す　動き

ヒトDガ　モノAヲ　（トコロCニ）

手をさし、足を動かして、舞う。舞う人の、さす手引く手が美しい。

（手を）かざす、ひさし、差し足、行司さしちがい、枝ざし（＝枝ぶり）、（きせる・杯の）付けざし

2－2　手を前にだして、相手の脇にいれる（相撲）

自動詞　差す　動き

ヒトDガ　モノAヲ　トコロCニ

左をさして前に寄る。

両（もろ）差し、はりざし、差し手争い

2－3　手にもったものを前にだして、何かをはかったりする

他動詞　差す　動き

ヒトDガ　（モノAデ）　モノCヲ

物差しでタンスをさす。

差金（＝曲尺）、ものさし、指物、指物師、矩（カネ）ざし（＝曲尺）

2－4　傘を開いて頭の上になるように支え持つ

他動詞　差す　動き

ヒトDガ　モノAヲ

雨の日には傘をさす。日傘をさして歩く。

2－5　将棋の駒などを動かす、転じて将棋などをする

他動詞　指す・差す　動き

ヒトDガ　モノAヲ

1手さすのにも時間をかけた。2六桂と王手をさす。将棋を1局さしてみたい。

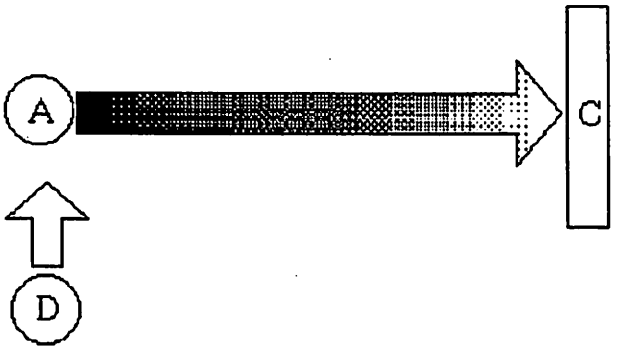
将棋さし（cf.碁うち）、さしかけ、十六むさし（六指）

区分の2－1、3は、共時的には滅びつつある用法かもしれない。また、2－2、5は相撲、将棋という特殊な分野に用いられるものであるし、2－4はほとんど「傘」の類だけについて用いられるものである。また、2－1、2では、典型的にはAがヒトの一部（主として手）で、「働きかけ」は自分自身に対してになり、再帰的なので、自動詞とみなしている。なお、「さし」が前接する複合動詞「さしあげる、さしまねく、さしもどす」などは、ここに並べた用法に関係するので、派生的意味2を、一類としてたてておくほうがよいように思われた。

「さす」の派生的意味3

《あるモノAが、あるモノまたは方向Cを、向いて示す。》

＜あるヒトDが、それをひきおこす。＞




派生的意味３では、Ｂは消えてしまい、また、「移動」も弱くなっている。Ｄは３－３以下の用法区分にあらわれる。

３－１　ある方向（のもの）を指し示す

自動詞　　指す　　動き・抽象的関係

モノＡガ　モノ（または方向）Ｃヲ

風見鶏が東をさす。時計の針が１１時をさす。磁石が北をさす。温度計が１２度をさす。すべての証拠が彼を（犯人だと）さしている。矢印は下をさしている。

こころざし

３－２　あるものがあるものを意味する

自動詞　　指す　　抽象的関係

モノＡガ　モノＣヲ

指示語「それ」は「見たもの」をさす。この場合の「虎」は彼をさしている。赤い印は敵軍をさす。

３－３　ひとが指などであるもの（方向）を指し示す

他動詞　　指す　　動き

ヒトＤガ　（モノＡデ）　モノＣヲ

彼が雲をさす。女は西をさした。何やらこちらをさして話している。喧嘩相手の方を顎でさした。棒で地図上の一点をさした。

指さす、人差指、まなざし、後ろ指をさされる、掌（ﾀﾅｺﾞｺﾛ）をさすように

３－４　ひとがひとを指名する

他動詞　　指す　　動き

ヒトＤガ　（モノＡデ）　ヒトＣヲ

彼が学生のひとりをさす。先生にさされて、質問に答える。教官の軍曹は竹の棒で３人をさして「たるんどる」と言った。

名指し（指名）、指図

３－５　ひとがある方向（の場所）へ向かう

自動詞　　指す　　動き・移動

ヒトD（＝モノA）ガ　トコロCヲ

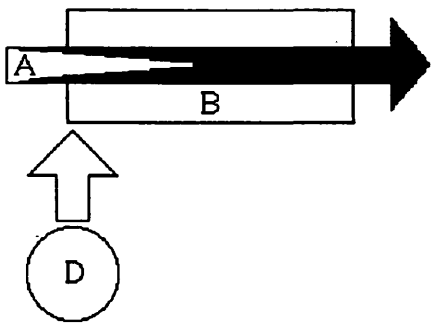
探検隊は北極をさして、進んだ。外輪船は一路対岸（の街）をさして前進する。勇躍、南をさして旅立った。

めざす

3－3、4のAは、指など、ヒトの一部であることもあるが、デ格で道具となっているので、再帰的とはみなさない。Dからの「働きかけ」は、Aを介してむしろCに向かっていると考えたい。3－5は、D＝Aであり、再帰的な意味の移動自動詞である。なお、3－5は、現在ではテ形（「～て」）でしか用いられず、移動の意味は希薄になっているようである。

「さす」の派生的意味4

《あるイキモノDが、あるモノAを、（モノ／トコロCにいたらせるように）モノ／トコロBに、いれる。》




派生的意味4では、Cが背景化して消え、Bの内部にAの一部がはいりこんでいる。Dからは、AまたはBに「働きかけ」がある。

4－1　ひとが何かの内部に（細長い部分をもつ）もの（の一部）を入れる

他動詞　　差す・刺す・挿す　動き・設置　　対応自動詞「ささる」

ヒトDガ　モノ／トコロBニ　モノAヲ

彼女がグラウンドにコーナーフラッグをさす。カナッペは、カラフルなつまようじをさします。使わない針は、針山にさしておきましょう。鍵穴に鍵をさす。川に棹をさす。彼は（自分の）腹に刀をさして自決を計った。鍼灸師が患者（の体のツボ）に鍼をさす。板の穴に、目釘をさす。ソケットにプラグをさす。花びんに赤いダリアをさしている。

状差し、挿し木、根ざす、とざす、鰆さし、米さし（単に「さし」とも）、肉刺し（フォーク）、針刺し

つきさす

抜き差しならない、彼にひとこと釘をさす、門をさす（鎖す）、戸をさす（鎖す）、故郷に根ざす、流れに棹さす、牽制球で走者をさす、大外から追い込んでさす（競馬・競輪）、とどめをさす

4－2　ひとが何かの内部に（道具・原因となる）もの（の一部）を入れる

他動詞　刺す・差す　動き

ヒトDガ　モノ／トコロBヲ　モノAデ

彼女が短刀で組長をさした。おかずを箸でさして食べるのは、行儀が悪い。串でさして、煮えているか確かめよう。キャベツはつまようじでさして、とめます。魚をもりでさす。バラのとげでさして、怪我をした。

串ざし、めざし、頬ざし、さし傷

つきさす

鳥をさす、鳥さし

4－3　生き物が身体の内部にもの（の一部）を入れる

他動詞　刺す・螫す　動き

イキモノDガ　ヒトBヲ　モノAデ

蜂が針でひとをさした。蚊がさす。クラゲにさされて痛い。

さし傷

冷たい風が肌をさす、舌をさすような味、光が目をさす、塩素のにおいがつんと鼻をさす、言葉が胸をさす

4－4　生き物が何かを（細長い部分をもつ）ものにとおしてとめる

他動詞　刺す・差す　動き　対応自動詞「ささる」

イキモノDガ　モノ／トコロAニ　モノBヲ

板前が串にねぎと肉をさした。百舌が木の枝に蛙をさす。針金に珠を3つさして飾ります。

串ざし、芋ざし、田楽ざし

4－5　（細長い部分をもつ）ものを、（何かをとおして）ある場所にとりつける

他動詞　差す・挿す　動き・設置・変化

ヒトDガ　モノAヲ　モノ／トコロCニ

胸に赤い羽根をさしている。髪にかんざしをさす。ポケットに万年筆をさす。腰に刀をさす。頬に紅をさす。

かんざし、二本ざし、脇ざし、おとしざし、さし歯、（旗）指物、門（カンヌキ）ざし、摑みざし、道中ざし（刀）、後ろざし（簪）、紅さし指

4－6　針などで縫うなどして何かものをつくる

他動詞　刺す　動き・生産

ヒトDガ　モノAヲ

学校で娘は雑巾をさした。職人が畳をさしている。刺繍をさす。（模様の）ミッキーマウスをさす。

刺し子、絽ざし

４－７　液体を何かに入れる、加える

他動詞　　注す・点す・差す　動き・設置

ヒトＤガ　モノ／トコロＢニ　モノＡヲ

妹が花びんに水をさす。煮詰まってきたら、鍋（の中／のスープ）に少し水をさします。自転車に油をさした。目薬をさす。お茶をさす。

さし水（そうめん）、水さし、油さし、醤油さし

熱戦に水をさす、火鉢に炭をさす

４－１、４のみが「ささる」と対応する。このふたつはＡとＢの格助詞が逆になる。Ｄからの「働きかけ」がどちらに対してであるかの違いである。４－４では、実際の動きとしては、むしろＢがＡの方に移動するほうがふつうであろう。４－２、３も似た意味であるが、Ｄからの「働きかけ」は、道具Ａを介してＢに向かっている。４－５、７は、ＢにＡをとりつける（加える）ことに重点が移っており、特に４－７は、それによるＤの状態変化を意味する。４－１は設置の意味ももちうるが、Ｄの状態変化は意味しない。

## ３．おわりに

仮説もまだ概略にとどまり、「さす」についても、示した以外の複合語や類義語との比較などが残されたままであるが、「かかる・かける」の意味分析以来気になっていた多義語の意味構造について、すこし手がかりが見えてきたように思う。特に、格役割以前の要素構造や、自他対応のとらえかたについては、今後、他の動詞の分析をとおして考察を深めていきたい。

注：「さす」の用例、用法分類については、各種の辞書を参照したが、いちいち示すことはしない。ただし、特に文型・動詞の意味区分については、情報処理振興事業協会技術センター1988年刊行の『計算機用日本語基本動詞辞書ＩＰＡＬ（Basic Verbs）』（「さす」はシート形式版(２)）の記述を下敷にしたので、掲げておく。

キーワード：　多義語　　中核的意味　　派生的意味　　自他対応

（なりた　てつお・名古屋市立保育短期大学）